

## 伴侶動物の周術期における疼痛管理指針

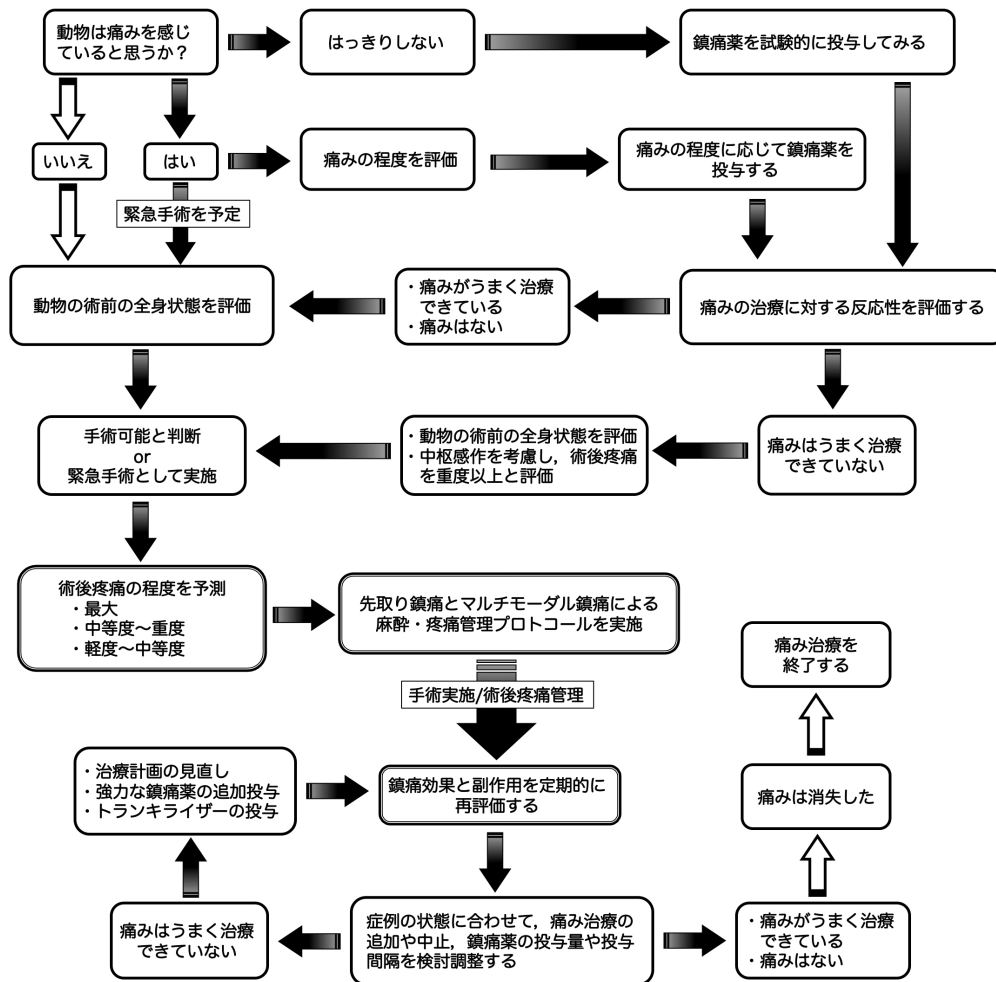
獣医麻酔外科学会 麻酔・疼痛管理専門部会

手術侵襲は人に痛みを生ずるので、同様の神経系を持つ動物にも当てはめることができる。外科手術による組織損傷は動物に痛みを生じ、適切に治療されなければ痛みによってストレス反応が引き起こされ、動物の福祉は脅かされる。獣医麻酔外科学会では、外科手術を受ける伴侶動物の健康と福祉の向上を目指し、周術期における疼痛管理指針を以下に提案する。

- 1) **術後疼痛の予測**：一般的に、外科手術に関連する痛みは組織損傷の程度が大きいほど強い。上腹部の外科手術は体表の小腫瘍切除術よりも痛みが強く、整形外科手術は重度で長く持続する痛みを生じる（表 1）。去勢術や避妊手術などの日常的な外科手術でも痛みが生じることを忘れてはいけない。伴侶動物の外科手術では、その外科手術によって引き起こされる術後疼痛の程度を予測し、痛みのレベルに応じて麻酔・疼痛管理プロトコルを計画する。
- 2) **先取り鎮痛とマルチモーダル鎮痛**：術後疼痛の治療効果と全身麻酔の安全性を高めるため、周術期（術前、術中、術後）に疼痛管理を実施する。痛みの防止および麻酔の安全性を高めるには鎮痛薬の投与時期が重要であり、痛みの刺激が加わる前に鎮痛薬を投与する「先取り鎮痛」が効果的である。また、作用機序の異なる複数の鎮痛薬を併用する「マルチモーダル鎮痛」によって、鎮痛薬による副作用を増大することなく鎮痛効果を増強できる。伴侶動物の周術期疼痛管理では「先取り鎮痛」と「マルチモーダル鎮痛」を採用することを推奨する。また、たとえ痛みが消失していても少なくとも術後 24 時間までは痛み治療を継続する。
- 3) **術後疼痛の認識と評価**：動物は痛みを感じているが、その表現は年齢、動物種、および個体によって差があり、外敵から自身を保護するために痛みを表現しないこともある。つまり、術後に痛みを表現していない動物でも痛みによるストレス反応が生じている可能性がある。同じ外科手術を実施しても、その痛みの程度や表現は個体によって異なる。大きな個体差のある痛みを適切に治療するためには、個体に応じた治療が必要である。そのためには、定期的に痛み治療の効果判定と修正（継続、追加、停止）を実施する必要がある、痛みの評価が重要である。伴侶動物の術後疼痛管理では、ペインスケール等を用いてバイタルサインの一つとして痛みの程度を可能な限り定期的に評価することを推奨する。とくに、麻酔終了から術後 3 時間目までは動物の全身状態とともに注意深く痛みの程度を評価することを推奨する。
- 4) **適切な看護**：「痛み」や「不快感」、動物病院の慣れない環境は、伴侶動物に不安を引き起こし、この不安が痛みを増大させる。入院症例では、伴侶動物が快適に過ごせる柔らかい寝床と温かで清潔な環境を準備し、適切な看護と優しい取り扱いによって不安をできる限り小さくする。

表 1. 伴侶動物に予想される術後疼痛の程度

| 痛みのレベル | 外科手術の例  |
|--------|---|
| 最も痛い   | 開胸術, 断脚術, 全耳道切除術, 骨盤骨折整復術, 頸部椎間板手術, 腎臓摘出術         |
| 中等度～重度 | 乳房切除術, 下顎骨切除術, 胸腰椎椎間板手術, 大腿骨/上腕骨の骨折整復術, 前腹部の手術    |
| 軽度～中等度 | 気管切開術, 耳血腫手術, 後腹部の手術, 歯石除去, 抜歯, 橈骨/尺骨/脛骨/腓骨の骨折整復術 |



伴侶動物の周術期における疼痛管理のアルゴリズム